

現代詩の問題

—— 高校生を詩を中心に ——

現代の芸術は自然主義的な芸術の持つ、人間と自然との幸福な汎神論的親和関係の中における「ところよい」感情移入衝動を持っていない。第二次大戦後の混乱の中で人々は再び価値の崩壊感覚を味わい、「荒地」の現実にあらためて直面した。二十世紀後葉にはいつた今日、現代芸術は統一的な志向の方向を持たず、無調的多様性を展開している。たとえば、外界の現象に対して、人間に内的不安がある時、対象への衝動が起こり、外界の存在の無限の変化、流転のうちから対象を確固なものとし、純化しようとして、幾何学的な合法的形式を持つ乾いた抽象芸術が生まれる。あるいは積極的に現代の機械化状況に即した客観的條件になつたものを作ろうとして冷たい抽象作品が生まれる。一方、細密な自然模写を行ない、寸分たがわぬ再現物をデペイズすることによって非現実的な世男を創り、醒めきつた近代人の自我意識の疲労の背後にかくされている無意識の世界を描き出すことにより、不安な生存状況上にたっている人間

森 下 弘

の無気味な感情を作品の中にあらわす超現実派の芸術……それらの状況では人格的な「心」と「心」のかわりに、感覚と感覚、皮膚と皮膚によるプライベートコミュニケーション（たとえば色彩だけの絵画など）が発生する。あるいはまた人間を疎外し、非人間化した世界の状況に対する怒りの感情、斗争的態度を表現しようとする傾向も生まれてきた。

芸術のうちでも純粹なものである現代詩の戦後の状況も「荒地」「列島」……のグループをはじめとして、以前のプロレタリア派、モダニズム派の対立としてでなく、主題（何を）と方法（いかに書くか）の問題を同一次元で扱いつつながら、個人の信条として芸術派、社会派のな一つ流れの両岸を形づくりながら、失われつつある「人間」、全体性のヴィジョンの回復を目ざそうとしてきた。しかし、マスコミ……により知らぬ間に、解らないままに日常生活の中に浸透し、感覚的な親近性を得てきているとはいえず、右のような現

代芸術の傾向は一般の人々からはあまり好まれず、理解されないでいる。そうした状態において現代詩を創ること、味わうということとはどのような意味を持つのであろうか。高校生のそれも、ここでは創作詩を中心に検討してみたい。

一 詩と認識

詩は本来、単なる伝達的手段、あるいは生活上の効用といった功利的なもののみではなく、伝達の道具であるとともに認識的手段でもあることばの諸機能を駆使して、生とか死とか、そういった問題を追求し、日常の秩序を超えた次元の高い秩序を再発見、再創造するものである。現代の状況が衝動的な感動、感情を流露させた素朴な抒情詩ではびたりしなくなっているとすれば、詩を素朴に「解ろう」とすることは難かしい、というより「解ろう」としてかゝるべきものではない、とも言える。もちろん高校生の時期として、主観的な感動や感傷やロマンから出発し、またそうした傾向の詩が多いのも当然であり、そこから、やがて自我や存在に目覚めていくものがあれば、そうした自発的な表現への衝動は大切にしたい。「忘れられたある日の日記の断片」

(昭30、女生徒)

思わぬところの空白のページ

この日は何を考え何を思っていたのだろう

それは生きてきたある時間の死がい

ポツンと残った空白のページ

……

思わぬところの空白のページ

お前は一人無言のまゝによこたわり

そしてなお一人淋しく

ぬげがらのように時間におし流されながらねむり続けている

また、彼らの世代が、戦争による崩壊感を経験したり、フロイディズムや相対性原理などを学んだりしている訳ではないが、一面やはり高校生とてもさまざまな現代的状況(進学競争・マスプロによる人間の画一化・マスコミの洪水・核戦争の不安・社会の表面・裏面の複雑さ……)の中に生きており、また青春は合理的なものと非合理的なものに同時にあこがれる二律背反の時期でもあり、純粹を求めめる時期である。そこから本当のものが生まれてこなければならぬ。

「文芸あるいは芸術一般において、高校生だから(つまり専門家でないから)という寛容が許されるかどうか。……なぜ、多くの作品が作品以前であり、自己満足の作品があるように見えるのか。書くということに対する厳しさと、本質的な愛情が足りない。絵画でいうイマジネーションの不足。と言えばそれだけでよいのかもしれない。が問題はもっと複雑である。……」

俺達は背後から押し出されてくる力の最前線

遠くから伝はるいのち

その美しい年輪の第一線

弓の様にしなりながら

炎に従って唄ふ

救ひは——あるひはないと言へやう

(山本太郎詩「そうして手は」の部分)

∧ YUCCA 第二号、編集後記、橋本武彦 ∨

「詩法」

橋本 武彦

うたうことが

こんなにも痛々しい時

そうして それがうたそのものであるとき

何故 痛むのか

どうしたらこの傷を と問うてはならぬ

まして 問う言葉を取ってはならぬ

傷は癒されぬがよい

……

もはや

人が不在と存在を

虚と真とを区別できぬ時に

罪が罪を罰することはいらぬ

うつくしくうたうこと

時として

センチメントに埋没すること

センチメントそのものに

全てをたくしてはいけなにか

それにしても

ぼくの全てが

ぼくらの全てとなりえない 今

ただ ひたすらに

独白することは むなし

が それは癒されぬがよい

むなしくとも 独白すること

ただ やるせなくうたうことだ

芸術の徹しさを知り、詩を創らずにおれぬから創る、という悲痛な誇りである。

また、ある生徒はこう言っている。

「自己の内部のイメージの蓄積がある点で崩壊し、その結果生み出される、読者が向かってくる前に読者を引きこむとができるような、そんなホットボトム（ホットツヤズ、熱い抽象……からの造語）を書きたい。」（杉山武士）と。

ところで、同じように現実への抵抗感をそれぞれに持ち、詠っている訳であるが、次のようなケースがある。

「夭折」

無常なる 無情の国に

剣を抜く むなしき虎よ

人の道 忘れし道を

蹴り行きし 悲しき孤影

よじれ路の 寒風かぜにふるへて

教え請う 師僧もあらず

どうも

慟哭の 涙にけむる

我が燃ゆる 胸の叫びよ

自棄腹の 虚栄の道を

彷徨いし 寂しき孤影

道草の 腕に倒れて

杖を受く 師僧もあらず

中尾 順 三

蒼雲の 桐の梢に
寂滅を 見詰めし鳥よ
敗北の 世捨てし道を
落ち行きし はかなき孤影
野ざらしの姿に果でて
灯り乞う 師僧もあらず

「現世への抵抗は、言っていると長くなるからよすが、現代詩への反撥もそこから生まれたものらしい。定型詩は形や言葉にとらわれて……と他人は非難するのだが、私は言葉の感じを大切に、詩情の漂いを愛する。……私は詩論など読んだこともないし、他人の詩もあまり読まない。ともかく私は何故なのか解らないまま詩を書いた。美しい詩が書きたかった。絵のような詩が書きたかった。ナイフを立てれば、血を吹き出すような詩も書きたかった。」（自作について）

「みんな工学部へ行くから、ぼくもそう決めてたんです。何故なら、工学部を出た方が就職がよくて、お金が沢山もうかるっていうんです。……そうすれば……あの御先祖様のお山や、戦時中に小作人に取られてしまった田畑も、苦むしたあのお屋敷も、みんな買いもどすことができるでしょう。建築家になるのです。そうして、西洋思想をぶん殴ってやるのです。」

「戦いの英雄が孤独である様に、受験生というものは孤独です。殊にぼくのように社会や周囲に逆らってばかりいる者は、四面楚歌の孤舟にあって、人間らしい寂しさに取付かれるのです。ただど素知

らぬ振りをして、朗らかに調子よきように、勉強にあくせくしている振りをしていなければならぬのです。そうしないと叱られるのです。」（小品「受験生」）

「山に登って、山を征服したという。これでは、初めから、人間と山とは敵同志で対立している……平和という言葉は捨たれるのである。あらゆるものを、己れの下に置こうとする。西洋思想は見事に東洋思想を下に置き、日本人はそれに酔って東洋思想の良点を忘れ、西洋思想のすべてを良きとする。……近代音楽は、古典音楽をつついて己れの下に置く。近代建築は、古代美術建築を踏みつけて建ち、近代高速道路は、緑をつぶして走る。」

「人間は各自の殻に籠り、それより出ようとすれば、他の者を傷つけねばならない。犠牲は何時の世にもある。それが社会だ。自分が動けば誰れかが泣く。純粹であるには、いか様にすればいいのか。不可能なのであろうか。」（創作「妹由紀子」）

『では御坊様、ぼくでも努力すれば普通のような人間になれますでしょうか……』

『なれます、必ず。書生さん、迷いがおありですね。見た所、愛の悶えと思える……』

『青春は二度とはやってみりません。その青春を、特攻隊の若者は太平洋に捨て、ここの僧達も、俗界を離れたこの寺に押し込めております。女性にしろのことを考えるのが青春ではありません。だけど、女性が居ても居なくても同じであればよろしいのです。自分でよきようになさいませ。』……

『若し、御坊様のお名前は——』

『この道場の一介の修業僧です』

僧はもう歩き出していた。

『もう一言なにか——。』

『不惜身命。真剣に生きなさい。』

（創作「朱雀門」、以上、中尾順三）

この作者の志向は、現代の浮薄さ、功利性への抵抗が、西洋的なもの、あるいは現代芸術をもひくくるめたものへの反撥となり、東洋的なもの、伝統的なもの（やゝ懐古的な）へと向かっている。袴姿で旅をしたり、永平寺に参籠するこの青年が、「定型詩」を好むことに不思議はないし、すぐれたことばの才能の持ち主であり、受験生として悩み、実利社会と純粹な理想との板ばさみになって悩みながら、東洋的な「悟り」の世界に、自分なりの救いを求めていこうとする志向は肯けるものがある。しかし、「定型詩」の必然性についての認識ができている訳ではないし、逃避的でないとも言えぬ保守的な姿勢は気にかかる。一般に、藤村の詩などを教科書で習っていても、文語定型詩を創る生徒はほとんどいない。そうした文語が日常生活とほど遠くなっている、ということだが、次に詩のことばについて考察したい。

二 詩のことば

伝達のためにはことばの持つ機能は単純な方がいい。一つのことばが一つの意味だけを持つことが望ましい。ところが詩表現にとつて、そうした制約のあることばでもって、「ことばでは言いあらわせない」存在そのもののダイジョンを提示しなければならぬ。そ

のためにはことばの複雑な機能（イメージ、ひびき、比喩……）を十分に駆使することが必要である。日記を行分けにしたような詩がきたり、鑑賞が体験の親近性に頼りがちになったりしてはならぬ。

「幸の国」

岩橋 楨夫

虹のかなたに 幸せの国があるという

まずしさもなく

病氣もなく

さい害もない

遠く 遠く

私も皆も 行けやしない

私達には勉強や仕事があるからね

私達はそこへ行けないから

自分の役目をやりとおし

今の世界をよくしよう

幸せの国に負けぬよう

良識的な理想と現実判断の持ち主でありながら、詩のことばの機能の理解ができていないと理くつの勝った道徳訓的な説得になりやすい。

三 イメージ

良識的な理想と現実判断の持ち主でありながら、詩のことばの機能の理解ができていないと理くつの勝った道徳訓的な説得になりやすい。

三 イメージ

口語自由詩以後、音數律的韻律、文体の節まわしなどが排斥され、小説のようなプロットの興味もない詩にあってはイメージが重要な要素になってくる。現代の社会的条件が複雑になってくると詩が単なる音楽的ムードにひたらせてくれるものであることは望まれなくなり、考える詩、として詩の中に必然的に思想的、論理的な要素がはいってくる。だが、それはひとつの感じとられるものときさねなければ、詩とはならない。(思想の抒情化) 絵画的イメージが客観的であり、知性詩に適っているゆえをもって新しい時代の美学としてとりあげられた。なぜ思想や観念が視覚的なイメージと同一なものと感知されるか。夢などの場合が考えられるが、ゲシタルト心理学の説明によると、「意識現象は各要素には帰着できない『私たち』がある。たとえば子供と大人の歌うメロデーは、その個々の要素である各音の高さは大いに異っても同一のメロデーだと聞える。反対に要素が同一であってもその配列状態の如何によって別の『私たち』が見える。……一定の刺激に常に一定の感覚が対応するものとは限らず……ゲシタルト(かたち、分節し構造化された全体)は部分(要素)に対し優位し、心的所与は形態化されている。」(中村秀「心理学」P.5~P.6)と考えられる。そこに思想的等価物としての感覚、イメージをことばの配列、操作によって探り当てていくのである。

イメージと言えば、中原中也の「一つのメルヘン」を鑑賞させると、生徒たちは非常な関心をもって「かわいた小石ばかりの河原」や「一つの蝶」のイメージから作者の心象風景を読みとろうとするし、純粹なものにあこがれている生徒たちは、美しいイメージを見する。

「雲」
赤ちゃんのかわいいヒトミが空をみている
その目に白い雲がうつっている
青い空に白い雲が風に吹かれて走っている
(昭和30、女生徒)

「讚美歌」

橋本武彦

ブルジャンブルの虚望
に白き線が

ふるえながらとび
おののきながら

急回転をし

不協和音をささやきながら

おちてゆく

人は皆な死に

歌はきこえず

ただ冷たい

重量のある物体のみが

思考もなく

きどりもなく

白い目で

ブルジャンブルの虚望

を見つめている

白き線は

歌う

ふるえる声で

素朴な声で

不協和音を

ささやきながら

白き透明な

声で歌う

人のいない

ブルシャンブルの

虚空の中で

白き線の

讚美歌は

ふるえる

油絵具の飛びちる白いタッチ、「人は皆な死に」…そこにかゝえる不安、を超えるために自分をつきはなし、オブジェ(物体)としてみる。そこにある即物的な「白い目」虚空の彼方を見つめる目。虚無あるいは崩壊への、あるいはその彼方への讚美歌が、抽象化された鮮かな絵画的なイメージによって描かれている。

四 ことはのびき

「聴覚的な機能がなければイメージは作られ得ない。…『シラブルリズムに対する感覚は思想とか感情とかの意識面からはるかに深いところに浸透してそれぞれの単語に生命を吹きこみ遠い過去に

忘れられたもとも原始的なものの底に沈みその根源に帰って何も

のかをわたくしたちのところへ持ちきたすのだ。…しかもそれは

すべて意味をとおして行われるものだ。』…言葉自体が持っている

ひびきというものは意味をその内面から支えていて意味の一部分

になってしまっている。」(「現代詩の方法」(解釈と鑑賞、昭、

36、特集、村野四郎)より、エリオットの引用に関する部分)

「口笛」

谷口 勝子

口笛、青く明度の高い

よどんだ

ざわめきの声に

ひらりと突き進む

暗くびしりと閉じた私

人達の中に、一人で住む私に

口笛、青く明度の高い

…

この詩、ことはの意味と抽象的でドライなイメージとを通して澄んだ口笛がひびいてくる。

「川エビ」

松田 紀子

丸いかなだらいの中

エビは静かに呼吸する

白くすぎとおった体の

すじが見えて

長いひげをひそやかにのぼし
すべるように泳いでいく

それは

月夜に静かに歌っていた
母さんの子守歌

この詩も「川エビ」のひそやかな姿態のイメージそのままに、幼
時の回想をさそう母の子守歌が聞こえてくる。

「トンボ」

私ハ トンボノヨウニ

目が イツバイアッタラ ヨイナト

オモイマス

ヨル アルクトキ

私ノ 背中ハ離レテ

忘レ物ノヨウニ 忘レラレタ

私ガ 私ノウシロニ 一列に並ブノデス

二重写シノ 写真ノヨウニ

前ラムイテアルイテイル

忘レタ私ガ

スルトーピストルデ

杉山 武士

パン

私ヲ ウチマシタ

トンボノヨウニ目ガアツタラトオモイマス

ふりかえると多様な姿で追ってくる自分、行く手に思いがけず待
ち伏せている自分。トンボ目のようにグルグル廻る目と、散乱し当
惑した自分のダブルイメージも成功しているが、カタカナばかりの
たどたどしいひびきもここでは成功している。

「イメージ」(散文詩)

橋 本 武 彦

深く青い色のノスタルジア海辺の砂のように——とああそれは真屋
の白い太陽アシの葉のささやきは古代の愛のささやきだろうか白
い太陽の陽はあまりに白すぎていたツメをかんでいる男の子は何
をくやんでいるのだろう愛アイあい愛とはなんであったのか目の
くぼんだ奴だあんな人はどうもいけない白い白い太陽のせいなの白い
太陽ゆううつ海の潮鳴真夏の午後は深く青い色のノスタルジア潮
鳴は地の底の奥底からの声古代にも潮鳴はあったの赤い花は音を
たててひらき白い太陽は音をたててふりそそぐ
それははるかはるか地のはての夏の落葉

黙禱

死者でない君は幻影幻のかなた生命への絶叫沈黙と炎の中に幻
の森ありとあらゆる物が有り銀の垂まきは上がる昨日の朝は温か
かったの今日は寒い川の水は赤く輝き黒い太陽は愛の讃歌何も
かもがああ幻のかなた生命への絶叫うすき笑いは夕暮の中に甘い

香りの悪の華は開いたおお没落のひなびた花——そいつへの愛は泥沼すぎて祈りと変えられ天よりの糸幻の銀針中世の銅色の空へのノスタルジア固くはきけのする色彩はイメージの絶叫死者でない君は幻影

接統語を敬遠しながら「の」と体言と体言の接着によりねっとりともといついでいくような語感をともないながら、それが「青い色のノスタルジア」「白い太陽」「赤い花」……白く明るすぎて憂うつな夏の海辺のイメージ、と暗い幻影の中の「黒い太陽」「甘い香りの悪の華」……のイメージを連結しながら、「死者でない君は幻影」「幻のかなた生命への絶叫」——死、没落によって訪れる原初の生命への復活の讃歌となり、シュールレアリスティックな不安定な生存気分表現となっている。

五 隠喩

思想の抒情化、感覚による置き換え、の方法として論理的（抽象的）な心象と視覚的心象との間に一つの類推を求めて暗喩の関係を成立させる方法がある。ある一つのものを設定してそのものによって思想を暗示する。つまりAの語の属性をBの語の属性にダブらせて移植する。しかもそれは単に新しいことばを発見し、使用するということのみでなく、両者を総合的に上に向かって結合し、たかめ、AでもBでもない抽象的、精神的な一つの場、存在そのものを創造していかねばならないと言われる。この場合、A、Bの距離乃至は極ができるだけ遠く、矛盾するものであればあるほど止揚された秩序・世界も深い訳で、この場合、意味とイメージもできる限り

密着しないようにさえされる。（エリュアール）今日のわれわれの世界は精神・感覚・宇宙……すべて矛盾・対立する要素にみちており、自分自身の思想を統一するためにはその要素と積極的に対決しなければならず、暗喩は現代の詩の重要な方法となる。日本でも自覚的に用いられるようになったのは戦後のことであるといわれる。

「美しい人」

（昭30、女生徒）

……

でも貴女の心にはとげがある

そのとげは貴女のその美しい姿を

氷のように冷たく石のようにかたくしてしまふ

陳腐な比喩は詩を平凡なものにする。

「私はローソクのように」

渡辺 詔子（昭35）

彼女はローソクに火をつけた

そしてそのまま旅立った

だがローソクは

うすい炎をちろちろさせて

たよりなく燃え始めた

彼女はローソクを見にこない

強い風でできるかも知れぬのに

だがローソクは

日に日に大きく力強く

真赤になって燃えていく

……

我が身の燃える苦しさに
声をしので涙を流す
だがローソクは
彼女が炎を消さない限り
無限に燃えていくだろう

友情ゆえのもだえがローソクのイメージにうまく置き換えられて
いる。

「友情」

北山洋子

冷たく凍って固い氷
たった一本の感情のくぎで
たたいただけで
真白なひびが入って
もろく 砕けてしまう

同じ「友情」をテーマにしたものだが、ちがった素材とイメージ
をもって別の世界を創造している。

ところで北喩を一步すすめて、「寓意」は、「単にひとつのものを他のものに置き換えるだけでなく、置き換えたものに生命を吹きこんで行為させるといふ点で比喩の場合よりも徹底した置き換えとなる。……するどい諷刺は徹底したアレゴリーをともなわなければならぬ。」といわれる。(現代詩講座1、関根 弘)

「蛙」

山下宏明

ゲエコロゲエコロ ガーガーガー
今日は四時間 ありがたや

かあちゃん弁当 いらぬいよ。
ゲエコロゲエコロ ガーガーガー
社会に理科に 数学国語
みんなさっさと おわっちゃえ。
ゲエコロゲエコロ ガーガーガー
授業も終わった 掃除もないし
早くおうちへ 帰ろうよ。

ゲエコロゲエコロ ガーガーガー
テレビを見ながら ごはんを食べて
あとでソフトを しに行こう。

ゲエコロゲエコロ ガーガーガー
今夜のテレビは おもしろくない
寝る子は育つよ ねっ／＼かあちゃん

今日は日曜 朝から快晴
宿題するのは ナンセンス

ゲエコロゲエコロ ガーガーガー
ソ連とアメリカ ちゃんばらはじめ

明日は地球の 最後の日、
ゲエコロゲエコロ ガーガーガー

一億メガトン とうとう破裂
あとに残るは 灰ばかり。

あとに残るは 灰ばかり。

ここでは流行歌的な、あるいは童謡やコマージュソング的なことばを逆手にとり、これでもかこれでもか、と騒がしい蛙の擬声語がとり入れられ、巧みに置き換えられ創造された作者の擬態が、自分をも含めた現代の高校生の生活や、世界を敵しく諷刺している。

参考資料

△昭37、11▽

「現代芸術の思想」(現代思想X)

(昭32、岩波書店)

「心理学」中村秀著

(昭32、朝倉書店)

「現代詩説本」村野四郎著

(昭29、河出書房)

「講座現代詩・Ⅱ・詩の技法」

(昭31、飯塚書店)

「シュールレアリスム詩論」飯島耕一著

(昭36、思潮社)

「戦後詩人全集」巻一

(昭29、ユリイカ)

「現代詩の方法」国文学解釈と鑑賞

(昭36、特集、至文堂)

「戦後文学」

(昭37、4、特集、シ)

「YUCCA」1、2号(廿日市高校文芸誌)(昭37)

その他、生徒の詩

(広島県廿日市高等学校教諭)